



[著者]

清水ヒデキ 豪援隊長
弁護士・移民コンサルタント
(MARN:9900985)

「オーストラリアから日本を助けよう」と豪援隊発足。16歳で単身オーストラリアに留学。その後、ボンド大学を卒業し、QLD州弁護士資格取得。長年に渡り、日本人ならびに日系企業、世界各国のクライアントのコンサルタント業務に従事。

弁護士 清水の

豪援隊かわら版

3月号

今月のジョーク 其の壱 「占い師とひねくれた男」

(ジョーク集より)

頭のいい、ひねくれた男が、占い師を困らせてやろうと一計を案じた
 「喜びそうなことばかり言ってくれるのはもう結構。今度は俺がどう
 いう人間なのか当ててみな」
 「そうですか、それでは……。まず、あなたは3人の子のお父さん
 です」
 「ほれみろ、間違いやがった」ひねくれた男は言った。
 「俺は4人の子の父親なんだ」
 占い師は静かな声で言い返した。
 「それは、あなたがそう思ってるだけです」



今月の視点 「これが私の生きる道」

岐路を迎えたオーストラリア

ここ数十年の国家努力により、多民族・多文化国家として名高い国となったオーストラリアも、ここに来てまた岐路に立たされているようである。国土の割には、人口の少ないオーストラリアにとって、地政学的にも一人前の国として生き延びていくためには、他国との貿易、そして安全保障の確保ができなければ、このご時勢において一国のみで生きていくことはできない。いや、ひょっとしたら、一国で生きていくことができる稀有な国としてのポテンシャルがあったのにも関わらず、そうなる機会を巧妙に奪われた国でもあるかもしれない。「ラッキーカントリー」と呼ばれるように、この国は食物自給率も高く、資源も豊富にある。治安も比較的良好、法治国家としても民主主義国家として国民はこの暮らしを「普通」のものとして暮らせている。とにかく、この国には法の下に与えられた自由と個々の人権が認められている。

「ラッキーカントリー」の現在

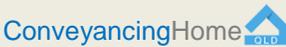
売るほどに資源があるこの国は、国の生計を立てるため、資源を売っている。そして、その資源が加工されたものを外国から買っている。売るものがあるだけでもいいという理論もあるが、しかしながら、単純に資源を売ることから従事してしまったこの国は、苦勞よりも楽な道を選んでしまった。資源を採掘して、売ることが簡単な仕事であるとは言っているわけではない。しかし、持っている資源を自らで加工するよりも、そのまま何もせず売ってしまうほうが簡単であるために、そちらを選択した。

そして、工夫をすることよりも、簡単にお金を生み出し、それをエンジョイするというよりも個人のライフスタイルを重んじるようになっていった。この国では今を楽しむことが重要であり、後世に何を残すかを重要視してこなかった。「一度っきりの人生だから楽しまなきゃ損。」というのが、オーストラリア国民のモットーであるということも筆者も留学早々にはよく言われた。「貯金をするよりも、自らが楽しむために使うべき。」「人生何とかかなるさ。」これが正にオージーらしい楽観的な人生観である。そして、そんなオーストラリア人の人生観に若い筆者はあこがれもした。「遊ぶために働く。」キリスト教がベースであるこの国では、労働は罪なのである。それは、かつてアダムとイブが禁断の実を食べてしまったことにより、神様より与えられた苦しみに由来する。罰としてアダムには「労働」、そしてイブには「出産」の苦しみが与えられたといわれている。残念ながら、そこに労働に対する人間の成長に必要な意義を見出すことには重きは置かなかった。

しかし、こうした安易な選択肢の選択は数々の弊害を生み始めた。「労働」を美德ともするこの国への移住者たちにより、「労働」を悪とするオーストラリア人は、どんどん商業において追いやられていった。移住者たちは、その勤勉さによりオーストラリア人から雇用を奪い、そしてオーストラリア人を雇用し始めていった。立場が逆転していったのである。これが、数々の人種差別を生み出してきた。貿易においては、売った資源に加工が加わることで、自らが売った資源よりも数倍高い加工品を買わされるという状況が生まれていった。ものづくりを必要となくなったこの国は、ものづくりをする国のいいお客さんになってしまったのである。そして、個

インデックス

- 今月のジョーク 1
- 今月の視点
- 今月の注目記事 1&2
- 今月のコピペ 1
- 今月の注目記事 3
- 今月のコピペ 2
- 今月のジョーク 2~4
- 今月の気になる言葉



<http://zoesangels.org/>
 Go オーストラリアグループ
 は、Zoe's Angels
 「Zoeの天使たち」を
 支援しています。



々のライフスタイルの尊重は、給与の最低賃金を上昇させることにもつながっていった。人件費が高いことにより、自国製品よりも必然的に輸入品のほうが安くなる。そのため、オーストラリアの農家は、作物を作るほうが損をするということで、生産を止めざる負えない。それは、畜産農家も同様である。基本的に第一産業に従事する人々にとっては、安い輸入品に太刀打ちできないので、損切りするしか生き延びる方法がなくなってしまう。

第一次産業だけではない。製造業も同じである。オーストラリアでは、もう自国で車の生産をしていない。いや、できなくなった。これも、人件費が大きな原因であるが、それ以上に俗に言う「オージー労働モラル」が原因であろう。人件費が高くて、それに見合う生産性が見込めれば何の問題もない。しかしながら、人件費として雇用主の支払う賃金とその生産性には、現実的にはギャップが存在する。オーストラリア人は、自らの生活レベルの最低ラインを確保するために、世界的にも高い最低賃金を行政的に設定し、それを強制することで国としての態をなしている。「見えざる手」により導かれた需要と供給による最低賃金の設定ではなく、「毎年ちよとずつ上げておけば、何とかなるでしょう」という、打算的な決め方ではない。貯金がなくても、1年に一度は海外旅行に出かけることが彼らにとって重要となったのである。

10位	オランダ=10.11ドル	5位	ニュージーランド=10.96ドル
9位	英国=10.13ドル	4位	フランス=11.03ドル
8位	ベルギー=10.31ドル	3位	モナコ=11.58ドル
7位	アイルランド=10.45ドル	2位	ルクセンブルク=13.05ドル
6位	サンマリノ=10.77ドル	1位	オーストラリア=13.59ドル

(2017年JETRO調べ)

「オーストラリア本日も反省の色なし」??

そのため、この国では雇用主に対する対応が厳しい。政治的に労働者は善であり、そして事業者・雇用主は悪なのである。そして、その数は労働者の方が圧倒的に多い。もちろん、罰せられても仕方のないブラックな会社もある。しかし、こうした雇用主の大半は会社の家賃と従業員の給料の支払いに追われる中小企業がほとんどである。取引先からの支払いが少しでも滞れば、キャッシュフローに穴が開き、自らの給料も確保できない雇用主が大半なのである。しかし、悪人である雇用主に権利はないのである。働きの悪い従業員を解雇することになっても、国としては善人である労働者を守らなければならない。そこで、悪の権現である雇用主には、さまざまな規制を課して、そうした解雇ができないようにする。労働者の権利は正に聖域なのである。

2 大政党制の崩壊

オーストラリアという国が今まで、うまく機能してきた一つの要因として2大政党制であったことが挙げられる。労働者の声を代表する「労働党」と経営者側の声を比較的代表する「自由党」の両党が、政権の取り合いをしながらこれまでの時代を乗り切ってきた。政権の交代が頻繁に起こるため、実力のない政治家はすぐに落選となる。そのため、行動力もあり、スピーディーでなくてもいけなない。その結果、こちらでは変化への対応が早い。しかしながら、ここ数年この2大政党制が揺らぎ始めた。「緑の党」然り、ハンセン女史の率いる

「OneNation」然り、第3または第4の声に、国民は耳を傾け始めた。2大政党制が崩れ始めたのである。そうなると、2大政党も対応せざる負えない。行動力とスピーディーさにおいて、現政権は労働党化を図ることに成功した。今までの支持母体である自営業者、中小企業オーナー、事業家を無視し始め、そして、あくまでも票数の多い労働者層に媚を売り始めた、いやアピールをし始めた。「労働者よ、自らの権利を守れ」、「労働者よ、外国から労働者を入れることを難しくするから、安泰じゃ」「労働者よ、最低賃金を上げてやるから感謝しろ、そして雇用主から搾取しろ」「英語が話せないような人間はオーストラリア人として認めんぞ」。。言い換えれば、「オーストラリア国民よ、我々はお前らの見方だ。国の将来、経済の成長、子供たちの未来よりも、今のお前らの幸せを優遇するんだから、うちの党の票入れろよ。」と叫んでいるのであるが、オーストラリア国民も馬鹿ではないので、そうした現政府の思惑に気づいている。そのような状況下でも、現政府は今のスタンスを止めようとはせず、ある一部の人間たちの思惑により、国の方向性をより特定の人間たちのために舵取りをし続けている。

オーストラリアの選択

民主主義における「政治」とは多数決である。そのため、現政権が今までの理想や政策を捨てて、政権の維持に躍起になることもひとつの政治的作戦である。今月行われた支持率調査によれば、現政権に対する支持率が労働党を下回って30度目を越えるそうだが、しかし、そのことにより失うものも大きい。政権に居座り続ける上では、いろいろな声を都合よく聞いていて自らの支持につなげていく必要があり、自らの保身をまずは考えなければならない。しかしながら、果たして現政権の選択した道は、自らの利益、そしてオーストラリアという国家に対する利益につながるものであろうか？支持率調査からは、間違った選択をしたという判断を'下されているように見える。政府と国民の考え方の相違が浮き彫りになってきているためなのではないだろうか？しかし、現政権はより一層ナショナリズムを押し進める方向を選択しており、その勢いは収まらない。吉と出るか凶と出るかは、これからおのずとわかっていくことになるであろう。いずれにせよ。オーストラリアという国家としては正に修羅の道を歩むことになるように思えてならないのは筆者だけであろうか。

今月の注目記事 其の壱

(news.com.auより)

ダットン大臣ここでも大活躍

<http://www.news.com.au/national/breaking-news/dutton-makes-case-for-loyalty-pledge/news-story/421f5377205d5d6b7b70be2ce923518a>

さあ、またこの時間がやってまいりました。我がダットン大臣が、またもや大活躍中という話題です。今度はオーストラリアの学校を舞台とします。

最近のダットン大臣ですが、少しご不満がたまっているようです。表情も苦々しく長めの面持ちでいらっしやる様子が、昨今よく見受けられます。ダットン大臣としては、ここ最近のオーストラリアにおける治安悪化、そして民族的な対立は「オーストラリアの教育がなっちょらんからだ」とお考えのようです。オーストラリアの国としての真意、それを万民どもに分からせよ

うとお考えのようです。そこで、今後はオーストラリアの学校に通う子供達にオーストラリアへの忠誠を誓わせる教育プログラムを導入されるそうです。「ダットン大臣、そしてオーストラリア万歳！」とオーストラリアの学校で子供達が叫んでいる様子、そしてオーストラリア人としてオーストラリアのために生きることを子供たちに誓わせるという、今までのオーストラリアのお国柄とは逆方向に国のかじ取りをされているダットン大臣、やはりバイタリティーのある政治家は違いますね。政権の支持率が下がろうと、自分の信念を貫かれる大臣には、今後も目が離せません。

オーストラリアという国の真意、そしてあり方について、改めてダットン大臣だけではなく、オーストラリア国民全員が、今後の国の在り方について考えなければいけない時に来ているようですね。

今月の注目記事 其の貳

(The Sydney Morning Herald より)

「統計と移民政策のまやかし」

<https://www.smh.com.au/business/the-economy/populist-drum-beats-wrong-numbers-drive-our-migration-debate-20180404-p4z7qk.html>

筆者は、ここ数年同じような内容の記事を書いておりましたが、ここ最近オーストラリアのメディアにおいても、明らかに我等がダットン大臣と現政府の移民政策に関するまやかしを指摘する記事が増えている。

このオーストラリアを代表するパスコ氏のシドニー・モーニング・ヘラルド紙に寄せられた記事もそれを示す一つである。

1. 現在の年間 19 万人の移民受け入れ数は、オーストラリアの歴史上確かに最高数である。それに加えて人道上発行されたビザならびに学生ビザ等を加えると、年間の海外からの入国者は約 25 万人。現在約 2500 万人のオーストラリアの人口からすると約 1%の移民を受け入れていることになる。しかし、いろいろな批評家がいう一昔前、ふた昔前のオーストラリアはどうであったか？さかのぼるは 1950 年のオーストラリア、その人口は約 820 万人だったそう。そして、そのころの海外からの受け入れの移住者は約 15 万人だったそうで、そうなると約 2%弱(今の倍)の海外移住者を古きよきオーストラリアは受け入れていたわけである。割合からすると、年間 19 万人の移民数は昔よりも減少しているということになる。

2. 海外から移住した人の数は、その後の出入国の記録においては、管理されているが、もし国内にいる際に死亡した際には、移住者の数から差し引かれていない。そのため、2016 年の統計によれば 50664 人の海外からの移住者が亡くなっているが、国内で亡くなった 50325 人に関しては、亡くなっているのに関わらず、前述の海外移住者の人数中に含まれているとのことである。25 万人のうち、5 万人は本当は存在していないことになる。これは、政府ならびにアンチ移民の人々が参照するデータ数値が 20%水増しされていることを示す。

3. 2015 年政府により発行された Continuous Survey of

Australia's Migrants (CSAM) 報告書によると、海外からの技術能力者移民 10 人中、9 人はオーストラリアで雇用されており、平均給与もオーストラリア人の平均よりも多い。海外移住者の 4 分の 3 は雇用されており、6 割以上は高技術を要する職種である。こうした事実を考察すると、海外からの移民がオーストラリアの一般大衆よりも有用であり、とどのつまりオーストラリア経済により貢献しているということになる。そして、こうした政府が発行した報告書の内容に関しては、アンチ移民政策支持者ならびにダットン大臣は、一切引用しようとならない。

4. イギリスの Porte 教授が仕上げた「イギリスへの移民」という論文においては、多数の移住者を受け入れることにより、国の失業率には影響しなかったし、給料への影響もなかいことがわかっている。それどころか、移民の受け入れにより生産性が上がり一人あたりの GDP が上昇したということも認められた。しかし、こうした論文は今のオーストラリアの主流路線においては日の目を見ることはない。

5. 失業率増加、都市部の交通渋滞、不動産価格の上昇等、すべて海外移住者にその責任を負わせることで、政府は自らの経済政策の無策に対する責任転嫁をしている。これも、都合のよい事実だけを取捨選択しているだけの浅はかな移民政策に乗せられている結果である。

こうした政府のやり方に対する指摘が、きちんと議論されるうちは、まだオーストラリアも大丈夫。しかし、これが一部のグループにより、アンチの動きが高まれば、オーストラリアの将来的な国力を脅かす、非常に重要な問題である。

今月のコピペ 其の参

「屁」

結婚を前提に付き合っている彼女を自宅に招待して食卓を囲っていたときのことだが……

ドブウツ (ㇿ (∴ * ∴) =3

全員「……」

明らかに彼女だ。彼女の尻から聞こえてきた。間違いない、屁だ。

すると母が「やだあ、お父さん！」とすかさずフォロー！
ナイスだ母さん！

俺はハイタッチしそうになったがこらえた。

しかし父は「いや、俺じゃないぞ！本当だって！」

父よ、何故にそこでマジギレするのか？

折角いい方向に向いてたのに！

アレか？彼女に「屁なんてしないダンディーな父です」とでも言いたいのか？バカが！

そうこうしてるうちに俺が焦り狂ってつい「ごめん、お、俺だ！」なんて言ったら、彼女が「す……すみません。私でした……」と正直に告白してしまった。

俺が彼女をなんとか救おうと悩んでいると、父が「昨日はキムチ食べた？そんな臭いだね」などと笑いながら言い出した。

俺はこの時以上に父がリストラされた理由を実感できた日はない

今月の注目記事 其の参

(Financial Review より)

ターンブル首相、30 連敗もまだ生き残りを計画

<http://www.afr.com/news/newspoll-not-the-only-test-of-leadership-pm-20180304-h0wzce>

政治家に詭弁はつき物。詭弁とは、道理の通らない、すなわちごまかしの議論であるのだが、最近ターンブル首相も詭弁を使わざるを得ない状況に追い込まれている。先日の 2 大政党の支持率調査の結果で、なんと 30 回連続で現政権が野党労働党より支持率を下回るといった結果が出た。それに対して、ターンブル首相は「支持率調査なんて、関係ない。肝心なのは党内でどれだけの支持を固められるかだ。」とおっしゃったそうだ。

確かに、現行の制度からすると総理大臣に指名されるのは与党の党首となるのが通常の流れであり、国民がなんと言おうと与党議員からの首班指名を受ければ、首相になれてしまうわけである。確かにごもつとも。

しかし、かつてターンブル首相がアボット前首相を首相の座から引き摺り下ろしたときには 28 回連続して政党支持率で負けたことがアボット首相退陣を求めた理由だと、あなたはおっしゃっていました。これが、詭弁ではなくて、何であるのか、首相明確な回答をお願いします！

今月のコピペ 其の貳

俺もあんま知らない親戚の子供(4~5 歳)が葬儀中に騒いでいた。

んで、あんまり酷かったので親戚のオッチャンが「うるせーぞこのクソ坊主！！」

と怒鳴りつけた瞬間、お坊さんの読経がピタッと止んでクソワロタ

10 秒くらいしてから子供のことだと気づいた坊さんが読経再開したが、その場にいたほとんど全員の肩が震えていた



今月のジョーク 其の貳

(ジョーク集より)

「父親の心配事」

毎晩遊び回っている娘に父親が問いただした。

「おまえ、男が出来たのか？」

「そんなの産んでみなきゃわからないわ」



今月のジョーク 其の参

(ジョーク集より)

「英会話と日本人」

アメリカのある病院の診察室で医者が日本人の患者に聞いた。

「How are you?」

日本人の患者は答えた。

「I'm fine, thank you. And you?」



今月のジョーク 其の四

(ジョーク集より)

「住民トラブル」

「二階の連中がうるさくて困るんですよ」

「タベも、12 時ころまで床をドンドン踏み鳴らしていたんですよからね、困りものですよ」

「それで目が覚めてしまったのですか？」と家主が尋ねると、その住人は、

「いいえ。幸いなことに、私は遅くまでトランペットを吹いていたから」



今月の気になる言葉「イチローと努力と天才」

努力せずに何かできるようになる人のことを『天才』というのなら、僕はそうじゃない。

努力した結果、何かができるようになる人のことを『天才』というのなら、僕はそうだと思う。

人が僕のことを、努力もせずに打てるんだと思うなら、それは間違いです。

イチロー(プロ野球選手)



Go Australia Group

ゴールドコースト事務所

Suite 222, Level 2, Watermark Hotel & Spa
3032 Surfers Paradise Blvd, Surfers Paradise QLD 4217

ブリスベン事務所

Level 5, 262 Adelaide St, Brisbane QLD 4000

E: info@goaustralia-visa.com

<電話でのお問合せ>

オーストラリアから: 07-5570-4542 (月~金 9:00-17:00)
日本から: 03-4283-8484 (日本時間 月~金 8:00-16:00)

www.goaustralia-visa.com